

## 成田山初詣

成田山新勝寺は、天慶3年、西暦940年、寛朝大僧正が、ご本尊不動明王を奉持、平将門の乱平定のため成田の地にいたり、平和祈願の護摩を捧修、見事乱を収めたが、不動明王より「この地にとどまれ」とのご靈告により、お堂を建立したのが始まりだ。以来1070年、年間1千万人の善男善女が詣でる名刹だ。

心願成就の護摩札をお願いし、本堂に座った。お坊様のご講話によれば、お正月とは、新年目出度いとされているが、真実の意味は、気付かず犯した所業を、新年に、反省し、今年こそは、行いを正すことを、お誓い申し上げる月だ。

二番目は、なんでも、お願いすれば叶うなどは、不心得、不信心者のすることだ、お願い事を叶えるのは自分自身が、確りして、願いごとが叶うよう、奮励努力することだ。神頼みでなく、自分頼みだ。

三番目の教えは、不動明王、憤怒の怖いご面相は、人々の過ちをとがめるのではなく、過ちをしないよう、真剣なご面相が、大慈大悲の御心、即ち、慈悲の御心である。概略以上のご講話であった。

なるほど、全くその通りなのである。

次に護摩が始まり、炊き上げる香煙のなかを、読経が響き、太鼓が打ち鳴らされ、護摩がたかれたり、お札や、持物を、火にかざし煙をくぐらせると、ご利益ありとのことで、善男善女が列を作った。

読経中は不思議に気持ちが落ち着き、なるほど、おまいりの、ご利益とは、信心とは、結局自分自身を信すことだと、妙に納得し帰途に就いた。



## 168号 節分豆撒き

2月3日の節分、氏神様の富岡八幡宮の豆撒きに初参加した。昨年まで、不眠、不休、煙の作法の修行で、立春を迎えた。

今年から氏神様しかも「歳男」の気分だ。ここ一番、一丁不景気「吹っ飛ばせ」と願いを込めた。袴羽織はかま着用し出番を待つ。

やがて、本殿にて節分神式行事に参列後、本殿前に設置した東西の舞台から、四組に分かれて豆撒きいう段取りだ。

芸能人、力士、議員、区長、消防署長、警察署長などと神社総代 神輿総代、一般人で総勢約百人だ。

芸能人は、みのもんた、五大路子、日向薫、山田みどりなど、力士は大鵬部屋の大鵬と、親方の二子山忠博、友鵬勝尊、外人としては、フランス人が数名参加した。

「ドドーン」威勢のよい太鼓の合図で、一升杓に山盛りの福豆を詰めかけている善男、善女に目がけて、まんべんなく「福は内」「鬼は外」の掛け声と「不景気吹っ飛ばせ」の思いを込めて一斉に撒き始める。



舞台下には、目出度い福豆を受けようと、善男、善女が、おおきな袋で「こっちへ頂戴」と、呼びかけ大盛況だ。

舞台には、「歳男 細田安治」と大書の掛け提灯に、火がはいり舞台を彩っている。

「おじいちゃん」「おじいちゃん」と孫に呼び掛けられ、「元気に育つよう祈り」目出度い福豆を撒いた。正に気分爽快、これで心の不況気分一新、元気をもらい、明日からの仕事にまい進することができる。

尚、福豆を追加し、会社の朝礼にて豆まきを行い「不況をふっ飛ばし」新たな気持ちで仕事に取り組む

## 168号 内井昭蔵の思想と建築展を見て

3代にわたる建築の「つくりて」内井昭蔵展をみた。タイトルには「つくりて」とあるが明治、大正、昭和そして平成に至る祖父、父、本人三代にわたり、三代目の昭蔵が120年間の才能を結実昇華させたのではないか、そこで「つくりて」は「作り手」であり「造り手」であり「創りて」であると思う。

初代の河村伊蔵は、1860年愛知県生まれ、1883年5月6日洗礼を受けたロシア正教徒で、四国松山にあるニコライ聖堂を現在の場所に移築した。敷地内に住居を構え、聖職者として仕え1940年2月5日75歳で没した。尚、現存するニコライ聖堂伊蔵が移築したものではない。

聖職者でありながら、教会の設計建築家として、二足わらじ、日本全国にロシア正教の教会を建設にかかわり、有名なのは、函館ハリスト正教会、豊橋ハリスト正教会、修善寺、金成、白河などである。

二代目の内井進は、伊蔵の二男として、明治34年に生まれ、建築設計を学び、父と二人三脚で教会の建築設計に携わった。

戦中戦後の苦しい時代、常におおきな製図板に向かって纖細な図面をから様々なモダニズム的設計をした。

代表的なものは川崎銀行の本支店などで、様式建築としての相貌を持っているものである。世田谷美術館で、当時の製図が展示されていたが、実に纖細きわまるもの、とても手で書いたと思えぬほど、精緻なものであった。

建築家三代目の内井昭蔵は、二代にわたる天才的の血筋を受け、建築設計を志して、菊竹精訓事務所に勤務し、建築デザイナーの乃生と結婚、建築家同士の二人三脚で、1967年独立、本格的な建築設計の道を進んだ。

創り手三代の才能が開花し、日本全国に「御所」始め、「ナザレ修道院」「世田谷美術館」「国際文化センター」集合住宅の「桜台コートビレッジ」「身延山久遠寺」「個人住宅」「学校」など2002年に急逝するまで35年間あらゆる分野にわたっての建築設計を手掛けた。

彼の思想は「設計と建築の基準は健康である」「価値の基準は健康にあり」を貫いていっていると言われている。



我々凡人は、「健康と設計と建築のかかわり」を具体的に理解し、健康との関連を説明できぬが、世田谷美術館での展示品から、なるほど言われてみれば、なんとなくわかった気がする。

このような天才が、聖職者そして建築設計者として、三代にわたり、異色の二足わらじでの、凄まじいエネルギーと、迫力そして結実としての、展示品の素晴らしい魅力に、引き付けられ、圧倒された思いである。

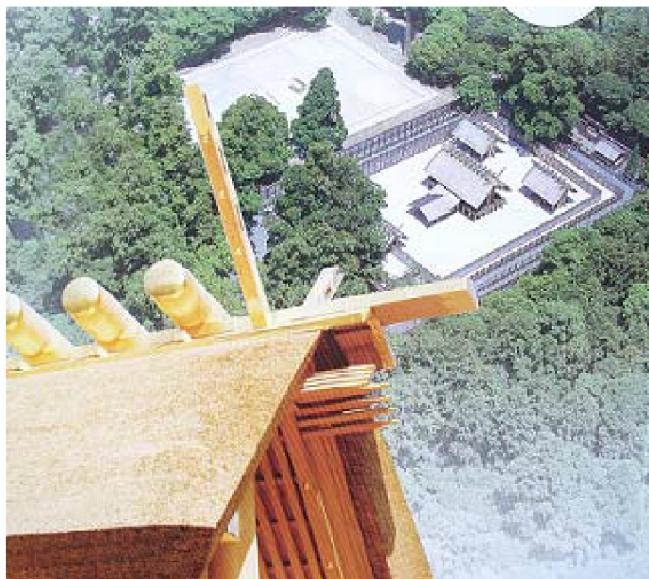
世田谷美術館（1985年築）

## 169号 伊勢詣ー1

20年に一度の式年遷宮を、平成25年に迎える「伊勢神宮」にお参りした。昔から「お伊勢さん」の呼び名で親しまれ、畏くも、皇室、即ち天皇家の祖先神をおまつりする「天照大御神」御鎮座以来2千年の歴史のなかで、とくに重要行事が、式年遷宮である。持統天皇の御代から、1300年余り、数えて61回にわたる遷宮は、世界にも例のない、神事の歴史と伝統を有し、日本を象徴する神社のなか神社であることは言うまでもないことだ。

式年遷宮とは、「全てを新しくするということで、全てを清らか、神々もいよいよ若やぎうんぬん、」すべてが新しくよみがえり、日本国も、人々も、全てが、神社とともに改められ若返るということだ。

なぜ、20年といえば、神社神殿に使われる木材は、その時代の最高の優良材を使ってつくられる。61回にわたる遷宮、1300年余りの歴史のきまりでは、風雨にさらされての耐用年数を20年としている。それ以下では、早いし、もったいない、それ以上になると、木材が腐朽する恐れありとしている。もう一つの理由は、20年という年月は、日本を象徴する神社としての、尊厳を保ち、古びて見苦しくならぬとしている。更に遷宮をつかさどる技術者たちの、ワザの伝承には、ちょうど良い年月ということで、20年と定められたとのことである。遷宮の敷地は、内宮内に、隣り合わせで、同じ面積のが用意され、20年ごとに遷宮即ち、建て替える仕組みが出来上がっている。遷宮の費用は総額300億円と聞いたが、莫大な金額だが、間違っていたら御容赦願います。続く



木材屋の目から見ると、式年遷宮は良いことに違いないが、20年に一度では、もったいないような気がしてならない。明治天皇ご在位のころまでは、神社の御山にある緑豊かな森林を伐採して遷宮用の材を貯っていたが、その後、森を伐りつくし、残っている巨木は楠が多い。楠はご存じ匂いの強い木であり、使い道が限定される。

主な用途としては、タンスの虫よけ樟腦の原料だ。樟腦以外の使い道として、防虫タンスなどだが、今ではタンスの需要が少ないので、使い道が限定されている楠は需要が無く、伐り倒されもせず、巨木として残っている。

神社用の主材となる檜の巨木は皆無である。植林こそしているが、使えるようになるには、数百年かかると思われる。そこで現在は、木曽の御料林から伐り出され、まだまだあるというが、こちらも無尽蔵では無い、いずれは枯渇するのではないか。

昨近の環境問題からすれば、伊勢神宮ご本尊の御宮が、人間の一生の3分の一以下の年数で、取り壊されるのは、いかにも、不憫であり、勿体ないことだ。木材屋として、使っていただくには大変ありがたいが、いずれ枯渇してしまう。これは時間の問題で避けられないことだ。

環境問題が叫ばれ、地球温暖化防止、CO<sub>2</sub>削減などなど、地球を守ることではないか？その一環として木材を大事につかい長持ちさせることではないか。資源もお宮も長持ちさせることはできないか？こんな素朴な疑問は私だけだろうか？解体した材は、全国の下社へ払い下げ、再利用していると聞く、それにしても勿体ないないことだ。

戦後から高度成長期に建てられ、耐用年数25年～30年といわれる住宅と同じスパンで考えるのは、全く勿体ないことだ。

最近、新たに建てられる住宅は、量より質のコンセプトで、超長期優良住宅などが注目されている。資源有限の時代、環境保護、森林はCO<sub>2</sub>削減の目標を定め、建てる家は第二の森として、CO<sub>2</sub>を固定し、地球温暖化の切り札として重要な位置づけだ。さらに言えば、集成材を使うべしである。集成材を使えば、資源は何十倍も長持ちする。資源の有効利用と、地球温暖化防止一石二鳥の効果あると信ずる。

こんな発言は、昔なら不敬罪ものだが、「けしからん」とお伊勢様に叱られることを覚悟で提言する。続く



名古屋経由で一路伊勢に向かう。名古屋は、トヨタを筆頭に、日本を代表する大企業があり、文字通り日本の、ど真ん中で、時代の要請にこたえて大きく変身している。

19号線にぶつかる、北は長野新潟、南は大須方面である。昼食は、名古屋名物「ひつまぶし」で熱田神宮の北側にある蓬来軒で食べた。

月曜日、午前11時の予約で入ったが、すでに先客があり、我々が入ると、続けてお客様が詰めかけ、またたく間に満席、店の外にまで行列ができる盛況ぶり、世間の不景気、どこえやらの繁盛ぶりだ。

「ひつまぶし」とは、「うな丼」のようなものだ。ウナギの焼き方から、調理の仕方、食べ方までが違う、名古屋風に変えたものだ。

ご存じ、ウナギの割き方は、関西が腹割き、関東が背開きである。腹割きとは、関西は商人の町、商いはお互い腹を割るから始まった。背開きのほうは、武士の治める江戸でうなぎを食するには、腹を割くのは縁起が良くない、腹割き即ち切腹を意味するもの。口に入れるうなぎの腹を割くのは、不届き千番として、腹割きの、割きでなく、背開き、つまり、開くとして縁起を担いだものだ。

つぎに焼き方も違う。関東では蒸してからたれにつけながら焼くのが一般的だ。関西では、うなぎはマムシと呼び、生で、いきなりたれをつけながら焼く調理だ。このたれには、それぞれの御店の秘伝がある。

そこで、「ひつまぶし」とは、うなぎのかば焼きを、細かく刻みお櫃のご飯に「まぶす」「お櫃」に「まぶす」が「ひつまぶし」の語源だ。食べ方は、

1. そのまま茶碗にとって食べるうな丼式
2. お代りのように、薬味（わさび、のり、みつば）をのせる
3. お茶またはだし汁をかけ、お茶浸け
4. 1から3のうち、気にいった食べ方で食べる。

以上が美味しい食べ方です。



## 172号 上海事情

中国万博

中国万博へ行ってきました。

日本は不景気の真っただなか、日本館に日本の未来が隠されていないか、この不景気を突破するヒントはないか。

中国はいまや世界経済の牽引車バブルと言われているがその実態をこの目でみたい。中国へはこの二十年間で10回以上は行っている。行くたびに激しい変化に驚かされるばかりだ。

そして、「どのくらい変わっているか？比較できる」こんなことも考え行くことにした。きっかけは、東京商工会議所が、中国万博視察を企画していたので早速応募し、今回6年ぶりの訪問である。

約3時間半の飛行で上海紅橋空港に着陸、日本との時差はマイナス1時間、紅橋空港は上海市の中心部から西へ環状線の外側にある昔からの空港だ。現在万博客専門となっている。

紅橋から高速道路に乗り、中心部へ向かう道筋には、高層ビルが立ち並ぶが、古くからの低層ビルは高層ビルの陰になり、ひっそりと遠慮がちにかしこまっている街並みが続く。高速は南北高架路から、下一出口経由で西藏南路そして三牌楼路にある餘園に到着した。  
続く

新旧入れ乱れて乱立する上海



## 餘園

早速、余園路にある 上海緑波樓新楼にて、点心料理に、舌つつみをうつ。この近辺は、日本の浅草のような観光客も多く喧騒な雰囲気、緑波廊途いわれている、建物は木造で、約100年前に建てられ、増築とお神樂を重ねて概ね4階5階建てで、お城のような雰囲気だ。朱塗り金ぴかのなんとも素晴らしいものだ。赤を下地にしたキンキラキンの万艦飾で飾り、屋根は のきは、「つるぎ」か「水牛の角」のようにそりかえし天を突き、あたりを睥睨している。

古い中国と新しい中国が同居し、なにやら落ち着かない雰囲気、更に今回の上海万博対策として、外国人の目にふれるところは、急ごしらえの屏を巡らし、ペンキで装飾、目隠している。それも、古びた感じを与えるために、やや薄鼠色にしてあり、更に違和感を覚える。

420年前の 1559 年上海は海辺の小漁村であり、塩業が主たる産業であったころ、当時の有力者ハンバンハン氏の私邸に個人花園として造られたものだ。現在は、上海のなかでも、重要文化財として保存されもっとも中国らしさを残している庭園だ。あずまや木造建築の造りが軒を、空視点に向ける雰囲気は素晴らしい伝統的な建築物が配置されている立って物は、木造が多く、一昔前の日本の農家にある敷居を高くしてある。股がなくては入れないのは外敵の侵入を防ぐためとす詰めいされたが、私は、水の浸入を防ぐためではないかと質問したが返答なし。このように山や池を巡らした建築物、中国のもっとも中国らしい庭園と言われている。紙面の都合上、一つだけご紹介すると、1300年の歴史がある余園の築山岩には、72個の穴がつながり、上から下へ水が流れ最後に犬の口に似た

穴から池に向かって流れ出す見事な岩だ。続く